

江戸の教育力

高橋 敏 著

文科省によると、我が国の教育は、明治期以来、国民の高い熱意と関係者の努力に支えられながら、国民の知的水準を高め、我が国社会の発展の基盤として大きな役割を果たしてきた。

日本で初めて教育制度が作られたのは、701年の大宝律令とされる。その後も貴族や武士を教育する場が存在し、江戸時代に入ると一般庶民の学ぶ寺子屋が設けられるようになった。今回紹介する「江戸の教育力」は、江戸時代の文字文化と非文字文化、教育ネットワークの話である。

戦後、我が国は新しい教育理念に基づく教育制度を出発させ70年が経過した。その間、子どもたちは、物質的な豊かさや便利さの中で生活する一方で、他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ちの低下、基本的な生活習慣の乱れ、規範意識の低下など人間関係を形成する力が低下していると指摘されている。

著者は、今、素朴に「教育の原郷」ともいべき、まだ学校がなかった江戸時代の教育に、何かこの病を癒す、良薬が潜んでいないかと江戸時代の教育の魅力を教育史からひもといていた。

江戸の読み書き算用を担った寺子屋師匠は、筆子（生徒）のしつけ、礼儀作法、「一人前」に育てることに厳しい目配りをした。しつけや礼儀作法を身につける者だけが「読み書き算用」を学ぶ資格があるとされていた。正にこれは、文字の教育と非文字の教育は不可分一体のものとして考えられていた証である。

そして、これこそが江戸時代の教育の強み、「教育力」であると考えている。

江戸の教育といえば寺子屋である。寺子屋を

庶民教育のシンボルに押し上げたのは「家」の広汎な成立であった。江戸時代の支配も経済も庶民の家なくしては成り立たなかった。とりわけ、家の相続は死活問題で、我が子をいかに育て、家を継がせるかが親の悩みだった。特に、徳川の支配は、すべて御家流の書体で統一された文書を使って行われた。文書による契約が社会の基本原則となったため、読み書き算用を習得しなければ大変な不利益を蒙ることになった。

寺子屋での読み書き算用は、一斉授業を取らないで、個々の筆子（生徒）の実情に合わせて師匠がカリキュラムを作成した。しかし、全国共通の御家流がベースにあるので教材、教科書はほぼ同一の様式をとっていた。地域の特性を生かした教材も作られたが、寺子屋情報ネットワークが日本列島を隈なく網羅、包括していた。本書には、カリキュラムの内容と授業料等が詳述されている。

江戸時代の教育の本質的な価値は、文字・知識教育にあるのではなく、むしろ非文字教育の方にあった。そもそも教育の目的というものは、子どもを一人前にすることにあると考え、「預かり子・取り替え子」や「若者組」などの教育があった。江戸の教育力を基礎で支えていたのが「一人前にする」という、有史以来綿々と継承されてきた社会共同の非文字教育である。

江戸時代の教育が一大潮流を巻き起こして時代と社会を近代へ押し進めることになったのは、文字文化と非文字文化を横断・統括するバックボーン理念と、これを実現しようとした人々がいたからである。

更に江戸の教育力の強みは組織力にあった。家族と村共同体の子育て、寺子屋での読み書き算用、若者組での一人前鍛錬、それぞれが重複・錯綜しながらも相互に連携し、一貫した組織を作り上げていたからである。

（ちくま新書、203頁、680円）（長田利彦）